

19 世紀ドイツの海辺の風俗

柴 田 教 昭

Die Sitte des Seebades an der Ostseeküste im 19. Jahrhundert

Noriaki SHIBATA

はじめに

ドイツ人はいつごろから海と親しみはじめたのだろうか。そして、彼らは海に何を見、何を感じ、何を思索したのだろうか。歴史を遡るとドイツ人が海を意識し始めるのは 18 世紀の中葉以降のことである。オランダの海洋画やロビンソン変形譚 (Robinsonade) あるいはオシアン崇拜によって海の啓蒙がおこなわれた結果である。しかし、これらは画布上の海、活字で記された海であり、海風に髪をなびかせたり裸足で浜辺を歩いたりする海ではなかった。ドイツ人は基本的には内陸民であり、農耕と狩猟に従事してきた土の民である。湖沼や川などの“静の水”とは接してきたが、咆哮する茫洋とした海の“動の水”とは縁の薄い民族であった。＜海＞とは、レイチェル・カーソンがいうように「海辺に立つことによって、ほんとうに理解することができる」¹⁾ なにものかである以上、こうした民族が“動の水”と向きあうには、手軽に海を満喫できる場所がなければならない。その場所を通してはじめて＜海＞に出会い、永遠や自由や人生を＜海＞にみることができるようになる。

ドイツでは海の啓蒙と平行して海水浴場建設運動が展開するが、この海水浴場を海の体験空間と捉え、その歴史を辿ることでドイツ人の海に対する感性が見えてくるのではないか。こうした仮定から、先に筆者は『18 世紀後半のドイツにおける＜海水浴場＞の意味について』²⁾ と題する論考を著した。そこでは、ドイツの海水浴場建設運動を一気に盛りあげたゲッティンゲン大学の物理学者リヒテンベルク (Georg Christoph Lichtenobog, 1742-99) の海水浴場啓蒙論文『なにゆえにドイツには依然として大規模公衆海水浴場がないのか?』(Warum hat Deutschland noch kein großes öffentliches Seebad?, 1792) を取りあげ、海水浴場誕生前の

1) レイチェル・カーソン (上遠恵子訳) 『海辺 生命のふるさと』平河出版 1998, 4 頁

2) 拙稿『18 世紀後半のドイツにおける＜海水浴場＞の意味について』(『関東学院教養論集』第 7 号, 関東学院大学法学部編所収, 1997, S. 95-111) [以下『海水浴場』と略す]

ドイツにおける海水浴場建設運動の経緯と当時の海水浴場がいかなる場所としてイメージされていたかについて言及した。本稿ではその後の海水浴場の発展を展望しながら、海辺から生まれた風俗と海水浴場が同時代の文化に与えた影響をみることにする。

1 海水浴場誕生以前の動向

先の拙稿でもふれたことだが、海水浴場の誕生以前のドイツにおける海水浴場建設運動についてここで簡単にまとめておくことにする。

ドイツで最初の海水浴場建設運動がもちあがったのは1783年のことである。オストフリースラント諸島のユースト島に住む牧師ヤヌス (Gerhard Otto Christoph Janus, ?-1805) が同年7月7日にプロイセン王フリードリヒ2世に海水浴場の建設を訴える書簡を送った。これがドイツ海水浴場史の嚆矢となる。このヤヌスの書簡は今でもその全文を読むことが出来る。それを読むと、彼の主旨は海浜療養所の建設にあった。海水浴の発祥の地イギリスでは1750年代以降海水浴場は療養所として賑わいを見せていたが、ヤヌスはそうしたイギリスの海浜事情に通じていたと思われる。現在の海水浴場の一般的なイメージからすると、海水浴と医療は結びつきにくいだが、当初の海水浴は純粋な医療行為であった。これは日本の場合も同様である。余事になるが、日本最初の海水浴場は軍医総監の松本良順によって明治18年大磯に開設されたが、これはリュウマチ治療のためだった。どういった医学的背景から海水浴が推奨されたのかについてはここでは詳しく触れないが、簡単にいえば、当時海水浴は水治療法 (Hydrotherapie) のひとつであった³⁾。

ヤヌスの提案はどうなったか、これは完全に等閑に付された。時期が尚早であったといえる。一口に海水浴場の建設といってもそこにはクリアしなければならない問題が山積していたのである。一つは資金である。海水浴場の建設にあたっては、まず第一に海辺までの道路整備、海浜の宿泊施設や入浴施設の建設、入浴装置の導入、島嶼であれば定期便の周航とハード面を整える必要があったが、この経費を誰が賄うのか、あるいはそもそも海水浴は出資するに値する事業なのか、いまひとつ海水浴の評価は定まっていなかった。もう一点は海の啓蒙である。18世紀、風景美の発見により風景を一個の芸術作品のように鑑賞する感性が成立する。これにより山嶺、奇岩、風、雷雨などの自然の相貌が詩人たちによって新しい詩的照射をうけることになる。しかし、ドイツの海の啓蒙は遅れ、1780年代にはいっても海は一般民衆の表象レベルでは依然として海獣の棲む恐怖の海だった。海までの心理的距離はかなり遠かったといえる。海水浴場を建設するにはハードを充実させる前にこの距離を縮めることが求められた。

この心理的距離を短縮し、海を身近なものに感じさせるのに成功したのがリヒテンベルクだ

3) 拙稿『海水浴場』99-100頁を参照。

ったのである。彼は同時代のドイツ人のなかでは珍しく、イギリスの海水浴場を体験し、またドイツの北海沿岸を船旅したことがあった。彼はこうした体験をもとに、海水の薬効、海水浴の仕方、海辺の魅力を、ビジュアル的な写生文で描いて海の啓蒙をはかったわけである。全体としては紀行文という印象をうける。一般に、紀行文学は読者に旅に対する憧れを残す余地がないといけなといわれるが、リヒテンベルクのそれは今読んでも海への旅心を掻き立てられるものがある。同時代人には相当刺激的だったことだろう。

リヒテンベルクに触発されて、オストプロイセンではケーニヒスベルク大学の医学部教授メッツガー (Johann Daniel Metzger, 1739-1805) が、ノルデルナイではフォン・ハーレム (Friedrich Wilhelm von Halem, 1762-1835) が、帝国自由都市ハンブルクではクックスハーフェンの河川工事監督官ヴォルトマン (Reinhard Woltmann, 1757-1837) が、そしてロストックではフォーゲル (Samuel Gottlieb Vogel, 1750-1837) が海水浴場の建設にむけて一斉に行事を開始した。このなかでドイツ初の海水浴場をもたらしたのが最後に挙げたフォーゲルであった。

2 医師フォーゲル

フォーゲルは1750年3月14日エアフルトで生まれた。彼の父ルドルフ (Rudolf Augustin Vogel 1724-1774) は1753年ゲッティンゲン大学教授となり、18世紀ドイツの薬剤学及び温泉学に貢献した人物である。1766年リヒテンベルクが学生だった頃父フォーゲルの診察を受けたのが機縁となって、後年には文通をしたり家族ぐるみのつき合いをする間柄になっていた。息子のザムエルも父と同じく医学の道に進み、1789年ロストック大学の教授に就く。生来好奇心の旺盛だった彼にとって小港湾都市での仕事は物足りないものだったようである。彼が活躍できる新しい分野を探していたときにに出合ったのがリヒテンベルクの論文であった。フォーゲルはこの論文の読後、ただちに海水浴場の建設に向けて行動を開始することになる。

1793年8月25日、フォーゲルはメクレンブルク＝シュヴェリーン侯フリードリヒ・フランツ宛の書簡を公国上級官吏ヴァッヘンハウゼンに託した。その書簡の中で、彼は海水の薬効について言及し、海水療法を実践する海水浴場の建設を訴えた。同年9月8日、ドペラーンの夏別荘を訪れたフランツは建設のゴーサインを出した。公が即断したのは海水浴場事業を国おこしの事業とみなしたためであった。公の了承をとりつけたフォーゲルはドイツ国内の主だった温泉場を海水浴場のモデルにするため建築家のフォン・ザイデヴィッツとともに視察旅行に出かけた。二人は急行郵便馬車を飛ばしニーダーザクセン地方の温泉場を巡回し、海水浴場の青写真を作成する。当時温泉地として活況を呈していたピルモントでは大きな影響をうけた。途中、10月19日から21日にかけてゲッティンゲンに立ち寄っている。これはリヒテンベルクと海水浴場の建設先について協議するためであった。ドイツにはユトランド半島を境に北海とバルト海の二つの海があるが、フォーゲルはバルト海沿岸を、かたやリヒテンベルクは北海沿

岸をそれぞれ推していた。この邂逅は海をめぐるドイツ精神史では重要なものと思われる。というのも、18世紀において「風土」ということは「精神に影響を与える場所」⁴⁾と定義されていたが、この邂逅は海辺の「風土」の位置づけに関する最も早い時期の議論だったからである。

ドイツ初の海洋詩人といわれるシュトルベルク (Friedrich L. Graf zu Stolberg) がバルト海を母のような海に、北海をわがままなニンフに喩えたように、二つの海の相貌はまるで違う。時代が降って19世紀になると、荒波のたつ北海は「両刃の剣」⁵⁾に喩えられるが、海のイメージとしては男性的であり、かたやバント海は比較的穏やかな海でどちらかというとな女性的なものを想起させる。海水浴場の建設場所としては北海沿岸よりバルト海沿岸の方が水質分析や気候観察によっても優れていたが、リヒテンベルクはあくまでも前者にこだわった。これは彼が海水浴場を驚愕と惚恍の入り混じった感情をもたらし劇空間と位置づけようとしたためである。彼の海の評価システムの背後に18世紀の崇高美があるのは明らかである。18世紀の美学者E・パークは「崇高の源泉」を「恐ろしいもの、もしくは、恐ろしい対象に関連性を持っているか、または、脅怖に類似した方法で作用を及ぼすもの」⁶⁾と規定したが、リヒテンベルクは、恐ろしさで人間の精神を茫然自失とさせる海辺の劇的要素を、海水浴場の最も重要な要件とみなした。一方、フォーゲルは人体に影響を与える場所としての海辺の「風土」に重点を置いた。両者の見解は平行線のまま終わったが、最終的にはリヒテンベルクがフォーゲルに折れたかたちで論争に決着がついた。

11月12日ロストックにもどったフォーゲルは執筆活動に集中し、94年5月ドイツ人による最初の海水浴研究書『海水浴の有用性と利用の仕方について』(Über den Nutzen und Gebrauch der Seebäder. Nebst der Ankündigung einer öffentlichen Seebadeanstalt, welche an der Ostsee in Mecklenburg angelegt wird, Stendal 1794)を上梓することになる。これによりフォーゲルはドイツ海水浴場の鼻祖として歴史に名を残すことになった。

3 発展するドベラーン＝ハイリゲンダム

フォーゲルがドイツの各地を視察していた頃、大公フランツは従者とともに海水浴をしながら、海水浴場の建設先をさがしていた。そして、海水浴場にはハイリゲンダムが、浴客の宿泊所にはドベラーンが内定した。

フランツとフォーゲルがここを海水浴場の建設先に選んだのは、海水と海床の状態が海水浴に適していたためでもある。遠浅で波も穏やか、北海沿岸のように河水の混入がないのが利点だった。他にも様々な要因があった。ドベラーンは景勝地として18世紀の中葉から近在の人

4) アラン・コルバン (福井和美訳)『浜辺の誕生 海と人間の系譜学』藤原書店 1992, 309頁

5) Elsner, Alfredo : Die Sehnsucht nach dem Meer, Würzburg u.a. 1990, S. 34

6) E・パーク (鍋島能正訳)『崇高と美の起原』理想社 昭和48年, 60頁

たちが足を運んでいて、海水浴場への人出は十分見込めた。またドペラーンにある修道院には疾病や身体の障害を癒すといわれる＜聖なる血＞が保管されていて、宗教改革以前は有名な巡礼先になっていた。もちろん 18 世紀の終わり頃にはすでに血に対する信心はうすれていたが、依然として奇跡信仰は残っており、＜聖なる血＞の霊験を海水の霊験にすりかえるのは容易なことであった。またドペラーン近郊には豊かな森があり、狩りも楽しめるとあって、地の利には申し分がなかった。

フランスは海水浴場の建設費用を賄うために、3 個大隊 1000 人をニーダーラントのヴィルヘルム 5 世に年間 30000 ドッカーテンで移譲すると同時に戦死者・傷病兵・行方不明者に対しては特別支払いをすることをとりつけた。ここから彼は 93 年建設費用として 4250 ターラーを、翌 94 年設立基金として 12700 ターラーを出資した。これにより、人口わずか 900 人、所帯数 85 戸の小村であったドペラーンは一大行楽地へと発展することになる。

1793 年時点でドペラーンには 1 軒のガストハウスがあるきりだったが、翌 94 年には宿泊所が、96 年には比較的大きな館が、1802 年には 260 名収容可能な食堂を備えたサロンハウス、パレス、中国風のパピリオン、ビリヤード場、タバコ室、読書室、図書館が建設された。図書館にはゲーテ、シラー、ヴィーランド、クロップシュトック、ヘルダー、フィールディング、スウィフト、スターン、スモレット、シェークスピア、ラシーヌなどの文学作品をはじめ、ホガースの版画集まで完備されていた。1806 年には湯治場には欠かすことのできない劇場がオープンした。

またハイリゲンダムのほうでも整備が進んだ。1794 年ハイリゲンダムは一つの天幕と海水浴客の馬車をしまう馬小屋からはじまったが、95 年フランスは大規模な海水浴場の建設をフォン・ザイデヴィッツに命じ、96 年に冷水浴のできる木造の建物が完成する。これにより海水浴客が徐々に訪れるようになる。その後も整備はすすみ、1814 年から 17 年にかけて建築家のカール・テオドル・ゼベリーンによって中廊付きクアハウスが完成し、ハイリゲンダムは「海辺の白い町」(Weiße Stadt am Meer) と称されるまでになった。30 年代には 18 の浴室を完備した宿泊施設が完成した。この結果、ドペラーン＝ハイリゲンダム海水浴場の噂は上流階級のくちこみで徐々に広まり、バルト海を望む寒村はドイツ国内のみならず、デンマーク、スウェーデン、イギリス、オランダ、ロシア、ブリガリア、イタリア、フランスなどヨーロッパ各地から名士があつまる国際的な一大集合地になった。

このように北方の一寒村は大リゾート地へと変貌していくのだが、これは歴史の僥倖であった。周知のように、フランス革命を境に 1790 年以降のヨーロッパは経済的、政治的、軍事的に緊迫した状況にあった。イギリスのブルジョアは植民地と海上覇権の確保に躍起になっていたし、プロイセンは大革命の余波に恐れを抱いていた。こうした時代の風とドイツの海水浴場建設運動は無関係ではなかった。たとえば、帝国自由都市ハンブルクは貿易港湾都市という性格上、ドイツの内陸の諸都市と比較して海事に関しては敏感で、市政に絶大な影響力を行使していたハンブルク技術産業促進協会では海水浴場建設派が積極的な運動を展開するのだが、こ

れが暗礁にのりあげたのもヨーロッパの政情にあった。しかし、メクレンブルク＝シュヴェリーン公国は地理的辺境性のゆえに政治的暴風圏の外にあった。これが福となり海水浴場の建設にこぎつけることが出来たのである。

公国の地理的辺境性はその後も有利に働いた。1806年屈強を誇ったプロイセン軍がフランス部隊にイエナで敗北を喫し、メクレンブルク＝シュヴェリーン公国もナポレオンによって占領される。ナポレオンはすぐさまイギリスとの交易を遮断するためにバルト海沿岸を封鎖する。いわゆる大陸封鎖令が発布された。この間にフランスはアルトナに遁走を企て難を逃れている。しかし、翌7年彼はフランスの支配下にあるライン連邦に加盟し、ナポレオンに恭順する。1810年メクレンブルクの港からの船舶の出航禁止が通達されると、穀物価格が下落し、また工業製品の調達が不可能となって国内経済は大きく困窮した。その困窮を更に増したのが大陸封鎖の監視を目的にした哨所の建設や宿営しているフランス兵士たちへの支払いであった。国内が疲弊しているなかで、唯一賑わいを見せていたのがドベラーン＝ハイリゲンダム海水浴場であった。メクレンブルクは1806年11月から1807年7月までにフランスの属国になるが、ナポレオンは海水浴場には一切干渉しなかったためである。この結果、緊迫したヨーロッパの政治状況に無関心な上流階級がドベラーン＝ハイリゲンダムを訪れ、海水浴客の数は年々増加の一途を辿っていた。

1794年300人だった海水浴客は、1796年には500人に、1805年1200人、1810年1400人という具合に、四半世紀の間に約5倍に膨れ上がった。しかし、この海水浴客数のうちで実際に海水浴を行ったのはほんの一部にすぎず、1796年の500人の来訪者中の海水浴実践者は100名であり、1805年の1200名中でも約半数の650名であった。海水浴をしない海水浴場訪問者はドベラーンに建設された諸施設で娯楽と社交に日々をやり過ごしていた。

4 いざ、海水浴場へ

前章では海水浴場の歴史的変遷を概観しておいたが、以下では海水浴客の具体的な行動を追いつながり海辺の風俗を述べてみたい。

本格的なツーリズムが発生する以前、旅をする人たちは巡礼者、兵士、使者、職人、学生、商人たちに限られていた。こうした移動民を除いて、都市生活者や農民たちが自分たちの生活空間の外へ出ることはほとんどなかった。しかし、18世紀の中葉頃になると観光旅行という新たな行動様式がうまれつつあった。これは風景美の発見とそれに伴う知覚様式の拡張により、狭い生活空間から離れて新しい世界を見聞するために出かける人たちが現れたことの結果である。このころ文学においても表題に何々旅行と銘うった紀行文学が多産され、さまざまな地方や外国の文化や風習が文字で伝えられるようになる。

こうした移動が可能になったのは、都市間を定期的に運行する郵便馬車の制度が整い、運賃や日程を含めて具体的な旅行プランが立てられるようになったためである。しかし、19世紀

初頭でもバルト海の漁師町へ海水浴をしに行くには相当な決心を要したといわれる。本来旅行とは旅の途中の安全が確保されてさじめて成立するものだが、19 世紀の初頭でも旅は冒険にちかく安全の保障はなかったといっている。したがって、旅じたくは出立の何日も前から入念におこなわれた。羽ぶとん、椅子、衣装たんす、料理用の深鍋、食器など家財道具一式を入念に梱包し、先に送り出すことから始まった。これはホテルやペンションの情報が不十分で、万が一民家の上等の部屋が確保できなかったり、民宿のみすばらしい部屋に宿泊するはめになっても、あわてないためだった。また出発当日には、行く先々で入り用のものが買えないおそれがあり、塩漬けの魚、薫製の腸詰め、ワインなどの食料品を積み込んだ。万端ととのったところで、御者が御者台によじ登り、『ひゅー (hü)』というかけ声を合図に馬尻に一発鞭をくれ、馬車は一路バルト海をめざした。

当時、旅行者の足は乗合馬車 (Diligence) とオルディナール (Ordinar) であった。ともに郵便馬車であるが、オルディナールがスプリング無しの木製であったのに対して、乗合馬車はスプリング付き革張りの箱馬車であった。オルディナールは 6 人用 8 人用 10 人用の 3 タイプ、乗合馬車は 4 人用 6 人用の 2 タイプがあった。乗合馬車は足も速く快適であった。しかし、馬車は遅々として進まず、平均時速は 3 ないし 4 キロ、急行郵便馬車でも 7、8 キロにしかすぎなかった。平均的な 1 日の行程は 40 ないし 50 キロ程度だったという。これは隣国フランスも同じでフローベールの『まごころ』には「人々のあまり出かけない処」だった海水浴場に行くのに「道がひどく悪かったので二里を来るのに二時間もかかった」⁷⁾とある。「メクレンブルク産の逞しい栗色が、軽やかな足取りで、灰色の舗装をされた街道に、うつろな蹄の音をさせ、街道が明かるく後ろへ後ろへと去り、太陽が燃え上がるようにかがやき、乏しい視界が街道の埃でいっそう閉ざされたが、たのしいドライブだった⁸⁾」とトーマス・マンが書いているように海水浴場へ行く道が快適になるのは、道路整備がすすんだ 19 世紀の後半までまたなければならぬ。それまでの旅程は悪路だけでなく、小国間の不安定な政情、警察の厳しい検察で遅れがちであった。さらに、狭い車中の人いきれ、眠りこけた御者の運転ミス、不潔な同乗者の鼻をつく嫌な匂い、タバコの煙、節操のない無駄口など、旅行者の刻苦は数え切れなかった。また馬車の後部には郵便物、手荷物、荷箱、にしん樽がぎっしり詰め込まれていて、ちょっとした運転ミスで荷物の下敷きになって圧死するおそれがあった。また大雨が降った後は車輪が水たまりにめり込んで難渋するのが当たり前となっていた。さらに悪党や追いはぎの人災もあった。現在、鉄道を利用するとシュヴェリーンからパート・ドベラーンまでは 2 時間の行程だが、当時は 2 日を要したといわれる。馬車代は 1 ドイツ・マイル (7.5 キロメートル) がグロッツシェン銀貨 5 枚から 10 枚で、これは労働者の日当分に相当した。その他にも、御者へのチップ、手荷物代、座席指定券、通行券代、宿泊代金と費用は嵩む一方だった。こうした長旅を

7) フローベール (山田九朗訳)『まごころ』(『三つの物語』所収、岩波、昭和 15 年)、22 頁

8) トーマス・マン (望月市恵訳)『ブッデンブローック家の人びと (上)』岩波 1985 年、164 頁

終えて旅行者はようやく海水浴をおこなうことができた。

5 海水浴客の一日

難行軍の末、ようやく到着した海水浴場で浴客はどのような日々を過ごしたのだろうか。スケッチ風に1日の行動を追ってみよう。

海水浴客の朝は早く午前七時には起床した。簡単な身支度のあと海水浴場へ向かうことになる。シーズン中のドベラーンからハイリゲンダムへ向かう道にはエキパージュやレンタル馬車の往来が見られた。自前の馬車を持たない海水浴客は前日の夜にレンタル馬車を予約しておくのが一般的で、馬車の運転には土地の農民が従事した。

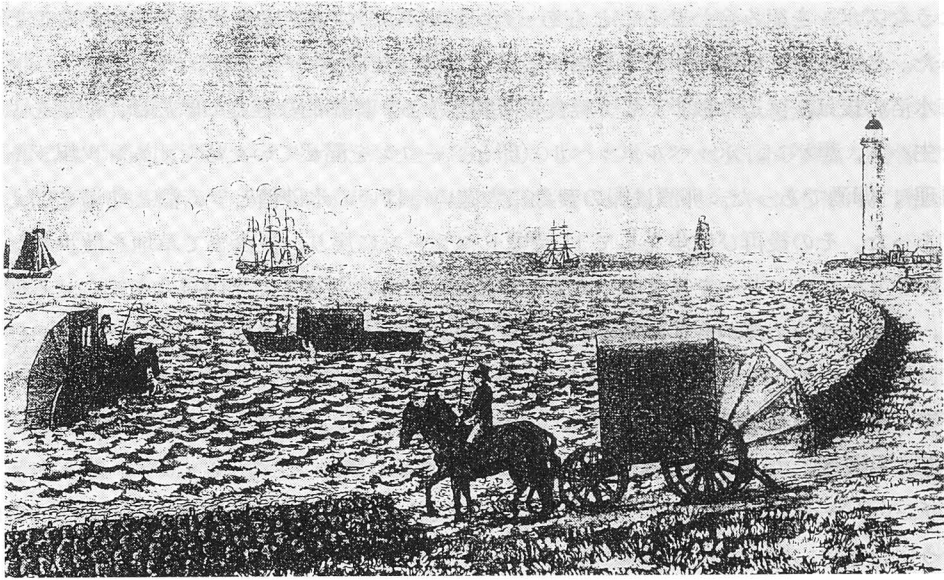
浜辺に到着すると海水浴となるのだが、現在のように海の家更衣室で水着に着替え、簡単な準備運動をして海に飛び込むというようなものではなかった。繰り返すが当時の海水浴は医療であった。そのために海水浴場には湯治医 (Badearzt) が常駐しており、海水浴客は医師の指示に従って入浴しなければならなかった。

海水浴客はまずはじめに海水浴馬車 (Badekarren) や海水浴船 (Badeschiff, Badeschaluppe) に乗り込むことになる。これらの乗り物は、基本的には海と人間を安全に繋ぐためのマシンであるが、その他にも純粋な海水を得るためや、これはとりわけ御婦人に該当するのだが、男性の好奇心な視線を遮蔽する目的もあった。

海水浴船は沖合いで入浴をおこなうための船で、スループ型帆船を改良したものであった。1793年フォーゲルはロストックの造船所に二艘の帆船の建造を依頼した。翌年、全身8メートル70センチ、幅3メートル30センチ、喫水線約60センチの扁平な小型船2艘が完成した。その中央部には長さ2メートル幅1メートルの格子の箱が設置されていた。それは海中に沈められ、上下に動かすことができた。乗船した数人の海水浴客は自分の順番がまわってくると、更衣室で着替えをし、この箱に入った。この箱の評判は当初から芳しくなく、「うなぎ箱」(Aalkasten) と蔑称された。

海水浴馬車の形態は箱馬車の後部に蛇腹式のループ屋根を取り付けたものであった。この馬車は適切な海深をもとめて潮の満ち干に応じて前進したり後退したりするのだが、その際馬車の移動には馬によるもの、人力によるもの、ウインチによるものなど三種類があった。波の荒い北海沿岸では4輪が、波の穏やかなバルト海沿岸部では2輪馬車が用いられた。初期海水浴場の風物ともいえる海水浴馬車は海辺の旅行者の目を惹いたもので、イギリス見聞録を書いたヴェンデボルン、詩人のアイヒェンドルフ、リヒテンベルク⁹⁾も詳しく書き残している。海水浴馬車を使った入浴についてはすでに触れたことがあるので割愛するが、こうしたマシンを使っても海水浴客の海に対する恐怖感は拭いきれなかったらしく、入浴前に気付けのコニャッ

9) リヒテンベルクが描写した海浜馬車による入浴風景はすでに紹介した。拙稿『海水浴場』101—102頁を参照。



図版 1 : Hedinger, S. 104

クもしくはシェリー酒を一杯飲むのが慣例となっていた。また婦人用の海水浴場では水泳の心得のある人が万が一のために待機していた。救助人には、当然のことながら、既婚の男性があたった（図版 1）。

つぎに入浴だが、基本的には医師の指示に従って 3, 4 回短い入浴をおこなった。リヒテンベルクは海水浴の注意として「私の感触では 3, 4 回続けざまに入浴して第一関節に火照りがくればもう十分で、そのあとは帰り支度のことを考えます。はじめての時は、自分の体調を知る上でも、体を沈めるのは一回だけにしておいて、時間を過ごさないようにすることを忠告しておきます。さもないと水からあがったときの心地よい火照りがなくなって悪寒を覚えることになります」¹⁰⁾と述べているが、現実にはもっと徹底したもので、フォーゲルによって 1797 年にたてられた規則はまったくもって入念なものだった¹¹⁾。

ところで当時の海水着はどんなものだったのか。海水着は入浴シャツ（Badehemd）と呼ばれていたが、この水着の素材はざらついた肌触りのフランネルであった。シャツに不格好な袋

10) Lichtenberg, Georg Christoph : Schriften und Briefe. Hrsg. von Franz H. Mautner. Frankfurt a. M. 1983, Bd. 5, S. 267-268

11) フィーゲルがたてた「一般的な入浴の心得」は 24 項目にわたる細かいものである。その全てを紹介することは紙数の関係でできないので、その一部だけここに引いておく。「食後及ビ満腹時ノ入浴ノ禁止。最良ノ入浴時間ハ天候ニモヨルガ午前七時カラ食前一時間前トス。」からはじまり「入浴ハ楽シイ気分デ水ヲ怖ガラズ行エバ、コレニ優ルモノナシ。」「入浴前ニ歩行シテ足ニ汗ヲカキ靴下ガビッシヨリ濡レテイル場合ハ、入浴後ニナ乾イタ靴下ヲ履クヨウニ留意スベシ。しゃつニツイテモ同様。」といった具合である。（Vgl. Prignitz, Horst : Vom Badekarren zum Strandkorb. Zur Geschichte des Badewesens an der Ostseeküste., Leipzig 1977, S. 40-42）

12) Vgl. Prignitz., a.a.O., S. 55

のようなズボンを組み合わせることもあった。このスタイルは1860年頃まで変わることがなかった。ストライプ模様の水着が登場するのは19世紀の後半からである。

海水浴の後は、浜辺の散歩そして軽食の時間となる。標準的な軽食の献立は、胡椒をふりかけた生ハム、黒パン、ホッペルポッペル（卵とベーコンを混ぜていたためオムレツ風ジャガイモ料理）、卵酒であった。卵酒は卵の黄身に大匙いっぱいの水砂糖とラム酒と熱湯を加えたものであった。その後再び散歩をして11時頃ドベラーンに戻り、昼食まで草地を散歩したり、商店のショーウィンドーを見て歩いて過ごすことになる。午後1時半頃昼食を知らせる銅鑼が鳴り、海水浴客の全員が食堂に集まった。もちろん遅刻は厳禁であった。ドベラーンの昼食の献立は筆者の手持ちの資料の範囲では分からないが、参考までに1830年頃のノルデルナイ海水浴場の昼食の献立をあげると、スープ、メインディッシュの牛肉もしくは魚、盛りだくさんの野菜、お菓子、カキ、ガルネール（車エビや芝エビの類）、サケ、キャビア、飲み物としてはワイン、ビール、ポーター（一種の黒ビール）であった。こうした滋養に富んだ海の幸に舌鼓をうった後は、楽士の音楽に耳を傾けたり、天気の良い日には近くの草地で珈琲テーブルを囲んだりする光景が見られた。海水浴客の中には町のキセル職人、仕立屋、靴屋、カツラ屋、床屋、宝石屋、銅版画屋、飲み屋、お菓子屋、肖像画屋、服飾専門店に足を運ぶ人たちもいた。

タベの海水浴場はにぎやかだった。まずはダンスパーティーである。社交にダンスは付きものだが海水浴場も例外ではなかった。

ダンスは上流階級の嗜みのひとつだったが、その一方で全身運動として推奨されてもいた。フォーゲルもダンスの健康上の有効性を認めているが、健康のみならず命まで失うものとしてダンスのやりすぎには注意するように警告をしている。余談になるが、この頃、ダンス熱が異常に高まり、エレガンスを通り過ぎて狂気じみたものになっていた。とりわけプラハのダンス熱は異常で、『過度のダンスについて』（1793）という警告本まで出版される有様だった。もちろん、そのダンスはワルツだった。

ダンスと並んでカジノも行楽先には欠かせない娯楽で、海水浴客の約三分の一が賭博目当てだったという。ファラオ、ルージュ・エ・ノワール、ルーレットなどのギャンブルに、メクレンブルクの候爵、資産家、富裕な金利生活者、高級官吏、休日になるとロストック近在の職人までが、緑色のテーブルを囲んで興じる姿が見られた。カジノは賭金に応じて<ゴールド・バンク>と<シルバー・バンク>の二カ所に分かれていた。開催期間は7月1日からシーズンの終わりまで、毎日6時間おこなわれた。しかし、こうした賭博熱は医者からすれば歓迎すべからずものだった。フォーゲルは1813年「賭事が熱心に行われておりますが、賭博には感情を刺激したり高じさせる作用がありますし、神経を張りつめさせたり激させたり、頭部、眼窩、胸部を火照らせたり、食欲や消化をそこねたり、下腹部の機能を失調させたりします」¹²⁾

12) Vgl. Prignitz., a.a.O., S. 55

と警告を発しているが、海水浴客には馬耳東風であった。メクレンブルク＝シュヴリーン公国は 1809 年 7 月 1 日からカジノを全面的に禁止にするが、ドベラーンだけは例外であった。これは私設の賭博場を抑え、公国が賭博場の収益を独占するためであった。記録によると、公国の国庫には年間約 3 万ターラーが入ったとある。このようにカジノは公国の貴重な財源であったわけだが、1849 年から 51 年にかけて賭博場が閉鎖されると、ドベラーンも徐々に廃れていった。

6 海水浴客の滞在費

海水浴客の一日は大体以上のような具合であった。かなり豪勢な保養という印象を受けるが、一体いくらぐらいの費用がかかったのだろうか。1820 年頃のデータによるが、宿泊施設の個室 20～30 シリング、ツイン 8 シリング、ロウソク代 12 シリング、昼食 24 シリング、1 デカンカーの食事用ワイン 20 シリング、ハイリゲンダムの浴室 1 室あたり 16～40 シリング、ハイリゲンダム＝ドベラーンの往復の馬車代 1 人当たり 6～8 シリング、入浴料金 24～28 シリング、海水浴馬車 1 台 14 シリング、更衣室の使用料 6 シリングであった。その他にも、医療入浴代、海水着代、タオル代、サービス代がかかり、1 日あたり最低でも 100～120 シリングが入り用だった。さらに、娯楽費としてダンスパーティー代、賭博代、アルコール代を含めるとその金額はさらにかさんだ。この金額の価値はなかなか実感できないが、フランスの占領軍が 1811 年ヴァルネミュンデに要塞を築くために雇った大工の日当が 1 日 12 シリングであった。9 年間の物価変動を多めに見積もったとしても、海水浴客 1 人当たり約 10 人以上の労働賃金を落としていたことになる。そして海水浴客のほとんどが家族連れで 4 ないし 6 週間滞在するのが普通であったから、その費用は莫大なものであった。したがって海水浴客は王侯貴族、資産家、富裕な商人、将校、上級官吏など上流社会に属する人々に限られていたのも当然であった。

7 海水浴場の文化的遺産

華やかな海水浴場は上流階級の社交場という役割以外に、文化的な遺産として医療面ではタラソセラピーの伝統をのこした。現在でもこのタラソセラピーは、真水を利用したハイドロセラピーや温泉のミネラル水を利用したクレノセラピーと並んで、「海と地上との相互の環境が創り出す生気候的条件を活かした海水入浴」¹³⁾として培われており、タラソセラピーセンターはドイツの各地に建設されている。北海沿岸ではバルトルム、ボルクム、クックスハーフェ

13) ジャック＝ベルナル・ルノーディ（日下部喜代子訳）『タラソセラピー 海から生まれた自然療法』白水社 1997、7 頁

ン、ヘルゴラント、ノルデルナイ、セントペーターオルディンク、ヴァンガーオーゲ、ヴェニクシュテット、ヴェスターラント、ダーメ、グリュックブルク、グロミッツ、ケーレンヒューゼン、ニエンドルフ、バルト海沿岸ではユースト、ラングオーク、ノルドフ、ヴィットドゥン、ウィーク、ツィンメンドルファー、トラーヴェミュンデなどである。こうしたセンターでは、バルネオセラピーに重点を置きながら、くる病や小児喘息に対して施術され、顕著な効果をあげているという。

海水浴場はスポーツ文化の面でも多くの影響を残した。18世紀から19世紀への世紀の変わり目の頃スポーツは、野外での娯楽を意味したスポーツから成績を競う近代スポーツへの移行期にあたっていた。この移行期に戸外における身体運動は健全学の立場から大いに推奨された。近代体育学の創始者であるグーツ・ムーツ（Johann Guts-Muts, 1759-1839）が水泳を、民族主義的愛国心からヤーン（Friedrich Ludwig Jahn, 1778-1852）が体操を啓蒙したのもこのころである。こうした時流のなかで療養所としての海水浴場には身体強化を目的にさまざまなスポーツがもちこまれた。フォーゲルはボーリング、バドミントン、ブランコ、シーソー、ビリヤードをギムナスティックと捉え、積極的に海水浴客に奨めていた。例えば、シーソーは肺病に効くという具合である。

このように海水浴場は身体文化の揺籃の地であったが、なかでも注目に値するのが競馬であろう。競馬の発祥の地はイギリスだが、ヨーロッパ大陸初の競馬場が誕生したのはここドベラーン＝ハイリゲンダムであった。19世紀の初頭には、イギリスを見本にした競馬場の建設を求める声が海水浴客の間からあがっていた。しかし、こうした海水浴客の提案に対してフリードリヒ・フランツは、1804年5月5日提案は無益であるとの書簡を宮廷長官に送っている。馬が走るのを見たり馬に乗りに行ったりするひとはいないだろうというのが彼の見解であった。そうした彼の意思とは裏腹に、1804年7月28日ひらけた野原での草競馬が催された。それから20年ちかく経った1822年にはドベラーン競馬クラブが創設され、その翌年の秋ドベラーンとハイリゲンダムの間にヨーロッパ初の競馬場が落成した。メクレンブルクの貴族たちはイギリスのサラブレッドを導入し、馬の飼育をしはじめた。数年後にはプロイセンやビュルテンベルクのジョッキーがレースに参加して、賞金の獲得を競い合っている。ドベラーン競馬場をきっかけに、その後、沿岸部に次々と競馬場が建設されていく。1834年の夏にはシュトラールズント、グライフスヴァルト、アンクラムに、1860年ブスブス、1930年ヴァルネミュンデに建設された。

自転車も海水浴場も縁がふかい。周知のように現在の自転車の原型となったのは<ドライジーネ>と呼ばれるペダル無しの2輪車である。この2輪車の発明者カール・フォン・ドライスが1817年に発明した<ドライジーネ>をはじめて披露したのがドベラーンであった。このとき走る機械と人間のコースを2周するレースがおこなわれ、1周目はドライジーネがリードしたが、2周目にランナーに追い越され惨敗におわったという話である。

その他にも狩り、水泳、レガッタ、ヨット、テニス、モータースポーツなど、今でも人気の

あるスポーツが、海水浴場を経由して各地に広まっていった。海水浴場はヨーロッパ全土から上流階級が集う社交の場であったわけだが、そこに集まってくる上流階級の人々は別の角度からみれば文化の伝播者でもあった。海水浴場は導入された文化を養い広める中継地であった。イギリスやフランスなどの大都市のサロン文化をもたなかったドイツにおいて海水浴場はサロンの役目を果たしたといえるかもしれない。

8 むすび

ここでは 19 世紀後半の海辺の風俗を寸描してむすびにかえたい。ドペラーン＝ハイリゲンダム海水浴場の開設以降、北海バルト海の沿岸部およびオストフリースラント諸島に続々と海水浴場が誕生する。この建設ラッシュ時期は一般に＜ビーダーマイヤー＞と称されるウィーン会議から三月革命までのおよそ 30 年間で重なっている。この 30 年間で海水浴場の第 1 期黄金時代となる。ハフクルーク (1813)、ウィーク・アウフ・フェール (1819)、キール (1822)、ヘルゴラント (1826)、ボルビー (1830)、ビューズム (1837) などの海水浴場がオープンした。これを支えたのはビーダーマイヤー期の旅行熱である。中間市民層の経済的余裕、交通網の進展によって海辺はぐっと身近なものになった。41 年にはツーリズムにあたるドイツ語の Fremdenverkehr が用いられるようになる。これ以降、海水浴場に市民階級の間層が押し寄せるようになる。彼らはそこで日ごろから洗練した趣味を存分に演出したり、また教養ある人たちとの出会いに自己満足したり、かりそめの情事に心をときめかすなどした。しかし、彼らの海辺の生活は、エレガンスからはほど遠い、成金的な経済にものをいわせたスノップたちのけばけばしさと滑稽だった。こうした海水浴場の雰囲気の低俗化に反発した上流階級はコートダジュールなどへ赴くことになる。大人たちの世界がどうであれ、海水浴に出かけた子供たちには夏のしあわせな思い出の 1 頁となった。

トニーは一本の木も生えていない海岸に、高く生い繁っている鋭い葦の間を、用心しながら歩いていた。海水浴客用の木造小屋が円錐形の屋根を尖らせてならんでいて、その間から海水浴客用の籐籠椅子が、もっと波打際におかれているのが見え、その籐籠椅子のまわりには、幾組もの家族が熱い砂の上に腹這いになっていた。婦人たちは、目を守るために青いサングラスをかけ、貸図書館の本を持ち、男たちは、明かるい色の服を着て、ステッキの石突きで砂の上にぼんやりとなにかの図形を描いていた。日焼けした子供たちが、大きい麦稈帽子をかぶって、ショベルで砂を抄ったり、波打際で素足を波に洗わせたり、玩具の船を浮かべたりしていた¹⁴⁾。

14) トーマス・マン、前掲書、186 頁



図版2：Hedinger, S. 134

これは『ブッデンブローック家の人びと』中のトーニがバカンスに訪れたトラーヴェミュンデ海水浴場の1シーンである。バカンス特有のあのゆったりした時間感覚につつまれた海辺の光景が写實的に描かれているが、海辺の風俗史の観点からいくつかコメントしてみたい。

まずは籐籠椅子である。これはシュトラントコルプ (Strandkorb) と呼ばれ、文字どおり<渚の駕籠>を意味しているが、この椅子は風よけ日よけのためのものである。この椅子が登場する前は天幕が用いられていた。その天幕にベンチや椅子を持ちこんでいたが、風が強い日は天幕がはためてうるさかったようで「パタパタ」(Luftschnapper)という異名をとっていた。このパタパタにかわってシュトラントコルプがお目見えすることになるが、それは歴史の偶然から生まれたものだった。この椅子の発明者は1845年ハンブルク近郊のベルゲドルフで生まれたヴィルヘルム・バルテルマンといわれている。彼は1870年ロストックに居をうつし、その他で籐籠屋をひらいた。1882年春のある日のこと、リューマチを患っている年配の婦人が姿をあらわし、親方に渚で使う風よけと日よけを兼ねた椅子を注文した。彼はその仕事を引き受け、早速、シグレヤナギとアシで編み上げた屋根付きの一人掛け用の椅子を拵えた。それは巨大な洗濯かごを思わせた。これがシュトラントコルプのはじまりで、10年後籐籠椅子は渚の風物になる。その後、改良が加えられ、一人掛け用に代わって二人掛けが主流になる。それは木組みにアシを編み込みストライプの布を内張りしたもので、わきには折り畳み式の椅子とサブテーブルが付いていた。これにより椅子の快適さは一段と高まった(図版2)。ヴァルネミュンデ海水浴場では1890年約100脚だった籐籠椅子は、97年200脚、1900年には550脚、1935年には3000脚以上に膨れあがった。そのため浜辺が籐籠椅子でびっしり埋めつくされる結果となり、籐籠椅子の貸し屋は許可制となり、海水浴場管理局に手数料を支払うシステムができあがった。



図版3：Bengen, S. 93

引用中に「日焼けした子供たち」というのがあるが、この日焼けも意外に新しい習慣である。大気浴や日光浴が健康に良い作用を及ぼすことは18世紀にすでに医学者たちに認められていたが、これらが正式の医療として確立したのは19世紀の後半である。日焼けと健康が医学によって結ばれる以前、日焼けは全然歓迎されていなかった。浜辺のイラストを見ると、ほとんどの御婦人方は肌を露出させていない散歩着姿で、日傘をさすか、つばひろの帽子をかぶっている。これは日除けのためである（図版3）。当時といわず今でもそうだが、青白い肌は上流階級の証で、日焼けした小麦色の肌は労働者や農民階級の徴と見なされていた。

砂城（Sandburg, Strandburg）も海辺の風物である。これは砂浜のあちらこちらに掘られたクレーターのような穴のことである。日本ではあまり見かけないがドイツの海水浴場ではどこでも見る事ができる。その歴史ははっきりしないが1880年代といわれている。文献やイラストなどに表れるようになるは90年代に入ってからである。砂城のはじめは吹きさらしの風をきらい穴を掘りそのなかでピクニックをするための風よけであった。その後、砂城作りはサンド・アートへと様変わりすることになる。今では日本の海岸でも砂の造形コンテストというかたちで見ることができるが、壁に波状の襞をつけたり、石や貝殻でさまざまなオーナメントが施されるようになった。また砂城には出身都市のワッペンや旗がたてられた。1900年頃の海辺の光景を撮った写真がある。子供たちが自分たちの背丈より高い砂城にのぼって思い思いのポーズをとっている。旗は海風になびき、銃座の凹みには樽の大砲が据えられている。無邪気な子供たちの戦争ごっここのシーンだが、こうした遊びのなかで子供たちは塹壕の作り方を



図版4：Hedinger, S. 141

習得していったのである（図版4）。

*

20世紀にはいるとドイツのいたるところで軍靴の音が響くようになった。張りつめた空気が町を覆い、白い砂浜にも戦時の雰囲気が持ち込まれた。ハーケンクロイツの旗を先頭にした一団が浜辺で鍛錬する姿が見られるようになった。こうした20世紀の海水浴場については別の機会に書いてみたい。

参考文献

- Bengen, Etta : BADELEBEN. Zur Geschichte der Seebäder in Friesland., Oldenburg 1992
 Buurman, Heinrich : Als Norderney Seebad wurde. Die wohltuende Seebadeanstalt 1797-1827., Norden o. J.
 Chemnitz, Johann Ludwig. Wangeroge und das Seebad., Jever 1833 (Reprint : Leer 1976)
 Eckert, Gerhard : Als die Badekarren rollten. Ostseebäder von Travemünde bis Glücksburg. Vergnügliches und Bemerkenswertes., Hamburg 1977
 Hedinger, Bärbel : SAISON AM STRAND. Badeleben an Nord- u. Ostsee. 200 Jahre. Hamburg 1986
 Kürtz, Jutta : Badeleben an Nord- und Ostsee. Kleine Kulturgeschichte der Sommerfrische., Heide in Holstein 1994
 Prignitz, Horst. VomBadekarren zum Strandkorb. Zur Geschichte des Badewesens an der Ostseeküste., Leipzig 1977

（本学非常勤講師）